AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2017年10月25日 VOL.40 第283号 定価550円
発行／AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町3-31-1
TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp
郵便振替：01250-2-40709 口座名：特定非営利活動法人アムダ

2017年 秋号 秋

救える命があればどこへでも

認定 特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
認定 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/
AMDA 兵庫
http://amda-hyogo.com/

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第14回
国連NGO・ネットワーク『地球村』 代表 高木 善之様

AMDAを支えてくださっている支援者の皆様に、インタビュー形式で様々なエピソードをお伺いしている「支える喜び」シリーズ。14回目となる今回は国連NGO・ネットワーク『地球村』（大阪市北区）の代表として、2003年から主にAMDAの緊急救援事業にご支援をいただいている高木義之さんにお話を伺いました。

交通事故で人生観が一変

AMDA 本日はお忙しい中、ありがとうございます。AMDAには度重なるご支援をいただき感謝しています。

高木 AMDAとの関わりは2003年、岡山市で平和イベントを開いた際、菅波茂代表をゲストにお招きしたのがきっかけです。偶然、前日にイラン大地震が発生し、急きょ、イベントの参加者に募金をお願いしたのが支援のスタートでした。菅波代表は立派な活動実績があり信頼できる人。その後も定期的に支援させてもらうことにしました。

AMDA 高木さんは交通事故をきっかけに人生観が変わったとお聞きしています。

高木 私が33歳の時、オートバイに乗っていて信号無視の車に正面衝突され、意識不明の重体となりました。約1年間、寝たきりの状態で入院。その間、「後悔しない生き方とは」「世の中のために何かをしたい」と自問自答して過ごしました。社会復帰し、勤務先のパナソニックで成果を上げたことから社長スタッフに抜擢され、フロン全廃、森林保全など環境政策を推進しました。

『地球村』の基本理念は「非対立」

AMDA 『地球村』は1991年設立。基本理念は「非対立」とされています。

高木 抗議や要求、主義主張、論争といった対立的な姿勢はいい結果につながらないので、「非対立」を基本として「事実を伝える、提案する、実践する、協力する」などの提言をしています。

AMDA 『地球村』は「永続可能な社会」を目ざし、地球環境、人道支援、飢餓貧困対策、緊急支援の4項目を柱に活動されていますが、最も力を入れられている取り組みは何でしょうか。

高木 人道支援です。貧しい国では、貧困ゆえに少年、少女が人身売買され、売春宿に売られたり、農園で働かされたりしています。売春宿の利用客に日本人も少なくありません。この事実を世界各国は正面から見つめてほしい。早急に子どもたちを救出しなければなりません。

講演活動は1万回以上に

AMDA グローバルな立場でリオ地球サミット、欧州環境会議などに出席し「地球市民連合」を提唱されるなど活発に活動されています。

高木 事実を伝え、社会を少しでもよくするため、これまで50冊の書籍を出版、講演回数は1万回以上になります。ふだんの生活は、講演活動と執筆、情報の受信と発信がほとんどですね。この活動の前はストレスで十二指腸潰瘍になったりしましたが、今は人生観と自分の行動が一致しているためか、体調を崩すことは全くありません。

AMDA 全日本合唱コンクールでは指揮者として金賞を受賞されるなど素晴らしい才能をお持ちですが、今はすべてを捨てて自分の信念を貫いておられます。頭が下がる思いがします。AMDAも一層の努力を重ねてまいります。引き続きご支援をよろしくお願いします。

（インタビュー内の敬称は省略させていただきました）

ネパール・トリブバン大学医学部、教育病院設立記念式典に参加

トリブバン大学教育病院（TUTH）は、日本政府からの援助を得て35年前に耐震構造法に基づいて建てられた病院です。2015年4月25日マグ　チュード7.8の大地震がネパール中部を襲いました。他の医療施設が機能しなくなった中、この施設だけは医療機能を果たし続け、地震直後多くの被災者が運ばれ医師たちは医療活動を行うことができました。

地震発生直後、TUTHは医療施設ならびに医療従事者が充実していたため、独自に医療活動を行うことができました。しかし、同病院では医療資材や医薬品を購入する資金が不足していたため、AMDAは資金を援助し、加えて同大学が被災地シンドゥパルチョク郡病院で行った復興支援活動に対して約1年間資金面で支援をしました。

トリブバン大学医学部創立46周年と同大学教育病院35周年設立記念式典が本年7月16日に行われ、AMDAから菅波茂代表ら3人が出席。大学医学部とTUTHよりAMDAに対し感謝状が発行され、臨席のギャネンドラ バハデゥル カルキ財務大臣から贈られました。

カルキ財務大臣から感謝状を受け取る菅波代表（右）

菅波代表がAMDAメチ病院とダマック病院を訪問

7月12日から13日、菅波茂代表はAMDAシンガポル支部長ラオ医師と共にAMDAダマック病院とAMDAメチ病院を訪問しました。AMDAネパールは、ダマック市、ドゥラバリ市、ブトワル市の　つの市で、それぞれの市の市役所、商工会議所、住民の支援や協力を得ながら病院の運営をしています。

ダマック病院にて

今年の5月に自治体選挙が行われ、それぞれの市に新しく市長や副市長が就任したため、今回の訪問では市幹部にお会いし、これからも病院の活動において、力を合わせ地域住民に最適な医療サービスを提供する病院にしていくことを再度誓い合う良い機会となりました。

AMDAメチ病院は地域に他の病院がないため、住民の期待が大きく、ドゥラバリ市役所、ドゥラバリ商工会議所及び、多くの住民からも寄付金が寄せられ、病院の増設が着々と進められています。

AMDAダマック病院は2年前の地震で建物に亀裂が入っていますが、現在も医療活動を行っており、改築という課題を抱えながら、地方で先端医療を提供できるよう、医療器械の購入及び医療従事者の技術向上に力を入れています。

ネパール産婦人科医師が来岡、先進医療技術を取得へ

ネパ　ルの女性医師が岡山県の2017年度国際貢献ローカル・トゥ・ローカル技術移転事業の補助を受け来岡。8月28日、同医師の受け入れに尽力したAMDA本部（岡山市北区伊福町）を訪れ、最先端の医療技術の取得に意欲を示しました。

医師はブダトォキ・ビマラさん（43歳）で、首都カトマンズから南東へ約700キロ離れたAMDAダマック病院に勤務する産婦人科医。

AMDA本部でビマラ医師は　学んだ技術を祖国で普及させ、患者サービスの向上に努めたい　と抱負を述べ、菅波茂代表は　彼女は年間6千人の出産に立ち会っている。新しい技術の取得でさらなるスケールアップを図ってほしい　とエ　ルを送りました。

ビマラ医師は日本語研修の後、9月4日から11月15日まで岡山済生会総合病院（岡山市北区）で腹腔鏡手術を中心に学んでいます。

来岡したブダトォキ　ビマラ医師　中央）

●現地レポート　「ネパール復興障がい者支援」　理学療法士　西嶋　望（ネパール在住）

AMDAによる障がい者支援活動は、現地の障がい者団体をパートナーに今年4月から第三期の活動が継続されています。できる限り支援対象となる障がい者に必要な活動とするためには、より近い立場にある障がい者団体からの提案や情報は大変有益です。それは当事者でないと気が付かない問題や悩みがあるという事によるものです。これまでの支援は、障がい者のニーズに応じて柔軟に対応してまいりました。ネパール中部地震が発災した2015年に始まった第一期は車いすのニーズが高く、特に寝たきり防止対策として車いすを必要とし、現地で製造した車いすをご使用になる方の身体や環境などの状況をみてお渡ししてきました。

第二期(2016年4月～17年3月)は、震災で障がい者となった方の多くが自宅などに帰り始めたことから、地方での生活に対して、特に寝たきり予防の必要性の高い方の訪問活動にウエートを移してきました。

第三期が始まった現在、パートナー団体であるＣＩＬカトマンズにて、活動の内容を共有する機会をもちました。これまでの車いすやポータブルトイレといった物資による支援に加えて、自立生活に向けた取り組みとして訪問活動について報告しました。

活動は1日に多くの訪問をすることはせず、じっくりとお話しするため一件当たり2～4時間かかります。これほど時間をかけますと、徐々に理解しあえる関係に変わり、最後は納得して私たちのアドバイスもご理解いただけるようになります。

これまでの訪問対象者数は88人（男性46人、女性42人）で、平均年齢は30.5歳。対象となった障がいは脊髄損傷が最も多く、続いて脳性麻痺など小児発達障がいが多い状況です。現在のプロジェクトの方針として、「救われた命を再び危険にさらさない」として、「寝たきりを防ぐ」ことを主に取り組んできました。

訪問を受け久しぶりに屋外に出た脊髄損傷患者（中央）

震災後、脊髄損傷リハビリテーションセンターを退院なされた方々も、テント・仮設住宅など住環境の変化、仕事や学校から離れるといったこれまでの生活スタイルの変化、慣れない居住地域における近隣住民との関係性構築など、自立した生活を獲得するためには課題が生じます。一方、震災によらない脊髄損傷の方も多いですし、小児疾患は相談できる機関も少なく家族の不安も大きい状況です。

これらの方々に対して寝たきり予防に必要な道具が車いすです。日本では車いすは移動のためという理解が主ですが、ネパールのような環境では屋内外全てを補う車いすの開発はまだ難しい状況です。まず最低限度、必要なことは寝たきりを防ぐための車いす。ベッドから離れ、部屋から出るための車いすです。それでも寝たきりになってしまう場合には、床ずれ予防や衛生管理、体調維持のための道具が必要になります。

最後に頼りになるのは、やはり人によるサポートだと考えております。どの疾患、障がいの場合でも共通してアドバイスしていますのは、寝たきり・寝かせきりはいけないことです。起きて、ベッドから離れ、部屋から出る、そして外にも出るといった生活スタイルを確立することです。

「国際医療貢献プラットフォーム」岡山で設立総会

世界の命を守る仕組みづくりを目指す「一般財団法人国際医療貢献プラットフォーム」の設立総会が7月9日、岡山市内のホテルで開かれました。

プラットフォームは、AMDAが昨夏、開いた第4回国際貢献医療フォーラムで、参加者からの提案をきっかけに設立が決まりました。今後の取り組みとして、先端医療技術の移転や災害時の人道支援、人財育成に取り組む医療、財界、教育関係者らがノウハウや情報を持ち寄ることで、岡山から「日本発世界貢献」を目指します。総会には、評議員や理事をはじめ、県内外の約200人が出席。代表理事の佐野俊二・米カリフォルニア大サンフランシスコ校医学部教授が「各界で活躍されている人たちが情報交換し、団結することで大きなパワーが生まれる」とあいさつ。同じく代表理事の菅波茂・AMDAグループ代表は「日本のモデルを各国に伝え、信頼関係を構築したい。志と力を貸してほしい」と呼び掛けました。

自治医科大の永井良三学長は「日本医療体制の解題」と題して講演。「お互いが支え合う持続可能な社会の実現に向け、足を地につけて挑戦してほしい」と訴えました。

続いて祝賀会があり、中島基善ナカシマホールディングス社長の音頭で乾杯し、出席者らは和やかに歓談しました。

プラットフォームの相談役、顧問は次の皆さんです。（敬称略）

【相談役】

岡田茂（認定NPO法人日本・ミャンマー医療人育成支援協会理事長）

【顧　問】

上昌広（特定非営利活動法人医療ガバナンス研究所理事長）▽小西恵一郎（公益財団法人国際医療技術財団代表理事）▽永井良三（自治医科大学長）▽吉岡洋介（ローム・ワコー名誉会長）▽徳川家廣（徳川宗家19代目・徳川記念財団理事）就任予定

AMDA 中学高校生会が活躍

スリランカで平和構築プログラム

2011 年から始まった異なった宗教、民族の生徒たちが交流するスリランカの「平和構築プログラム」が今年も8月5日から3日間、開催されました。悲しい内戦の歴史を乗り越え、次世代の意識改革を大きな目標としており、2013 年からは日本人生徒も参加、AMDA の理念である“多様性の共存”を学ぶプログラムとなっています。

2017 年度の開催地は、スリランカ中部のマータレという山間部の町で、参加したのは、マータレ、キリノッチ、トリンコマリーの 3 地域の生徒と、AMDA 中学高校生会のメンバーら総勢 76 人でした。

スポーツ・アート・カルチャープログラムでは、学校も性別も宗教も言語も関係ない混合チーム単位で競い合い、チーム対抗の様々なアクティビティーに取り組みました。このプログラムを通してチームの団結が生まれ、協力し合って一つのものを作り上げていく喜びを味わい、何よりお互いを理解することができました。2 日目夜のキャンプファイアーも夜が更けるまで盛り上がりました。

寝食を共にして過ごす 3 日間が終わるとお別れの時です。仲良くなった友達と最後の時間を惜しんで言葉を交わして抱き合い、瞳から涙があふれていました。生徒たちの顔は過去に起こった悲劇は繰り返さない、宗教や民族、言葉が違っても仲良くできるという自信で、顔が輝いているように見えました。

最後の別れを惜しむ AMDA 高校生

平和な社会はすべての人々の願いです。 AMDA は次世代を担う一人でも多くの生徒が平和について考えるきっかけとなるよう、継続してこのプログラムに取り組んでいきます。

高知県黒潮町の中高生と交流

AMDA と黒潮町が南海トラフ地震に備え 2015 年 2 月に連携協力協定を締結したのがきっかけで、今回黒潮町入野の大方高校を会場に防災教育交流会が実現。AMDA 中学高校生会の代表 3 人が 7 月 29 日、高知県黒潮町を訪れました。

交流会では、大方中学が「犠牲者ゼロを目指す」をテーマに、1 年生の時から色々な場面を想定した防災教育について発表。佐賀中学が「つながりはぬくもり」のタイトルで、保育園と小学校、中学校合同の訓練について、またテレビ電話を通じてメキシコの中学生との合同津波避難を実施したことを紹介。大方高校は「高校生から広げる防災」をテーマに、保育園児から高校生までが訓練を通し助け合う必要性を発表しました。そして、AMDA 中学高校生会は、東日本に訪問時の話を紹介し、大震災で学んだことを今後に生かす重要性を語りました。

交流会に参加した AMDA 中学高校生会のメンバーは、今回の交流活動について「黒潮町の防災訓練は危機感にあふれ、すごいと思った」「私たちも二次災害にも備えた真剣な取り組みが必要と感じた」と感想を話しました。

防災ボランティアリーダー研修で体験発表

岡山県内の高校生を対象にした「地域防災ボランティアリーダー研修」（県教委主催）が8月1日、岡山市南区の岡山芳泉高校で開かれ、AMDA 中学高校生会メンバーが体験発表をしました。

AMDA のユニフォーム姿のメンバー 6 人（男性 2 人、女性 4 人）は、AMDA の活動理念である「相互扶助」「多様性の共存」「援助の 3 原則」について説明。続いて、AMDA 中学高校生会の活動紹介、スリランカ平和構築プログラムへの参加体験他、東日本大震災募金活動や絆コンサート、ボランティアバスによる現地の人たちとの対話、復興グルメ F－1 大会の手伝いなど、数多くの取り組みを紹介しました。

南海トラフ地震についても触れ「防災は目をそむけてはならない課題」と強調。「AMDA には“困った時はお互い様”という言葉があります。有事の際はこの相互扶助の精神でみんなで乗り越えましょう」と呼び掛けました。

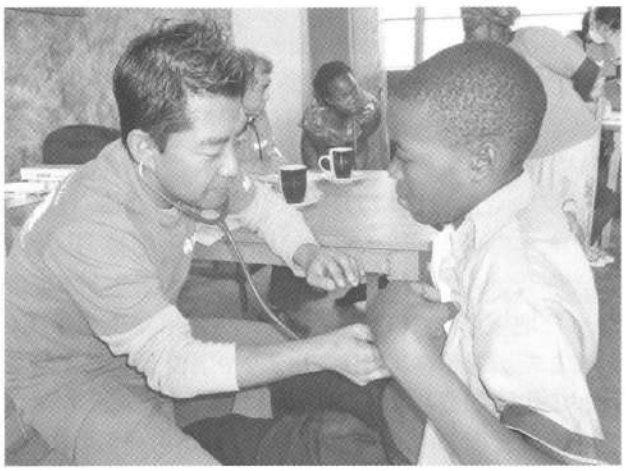
発表する AMDA 中学高校生会メンバー

ルワンダ学校健診事業

9月2日から10日まで、学校健診普及のため日本より、頼藤貴志医師（岡山大学大学院環境生命科学研究科、准教授）、中村信医師（国立病院機構岡山医療センター、新生児科医長）、福井花央医師（国立病院機構岡山医療センター、産婦人科）の3名がルワンダを訪れ、首都キガリのウムチョムイーザ学園とキバガバガ小学校の2校で健診を行いました。

今回の訪問の主な目的は、子どもの健康向上のため、地域行政、学校関係者、保護者を対象に小児科医師の立場から学校健診の知識・理解普及を行うことと、ルワンダ医療関係者へ早期に病気を見つけだし治療に結びつけることのできるよう技術移転をすることでした。

健診は日本人医師3人とルワンダ人医師2人の5人で合計900人強の健診を実施。まず学校での健診について必要性やチェック項目などを、校長をはじめ先生たち、両親、子どもたち、医学生ら約60人に説明をした後、子どもたち一人一人に健診を実施しました。


健診を行う頼藤医師

本活動は2017年度岡山県国際貢献ローカルトゥローカル技術移転事業（専門家派遣）の助成を受けています。

フィリピン・ミンダナオ島　国内避難民への支援

5月23日にフィリピン・ミンダナオ島マラウィ市で起きた武力衝突は現在も続いており、フィリピン社会開発省によると35万9680人の国内難民が発生（8月30日時点）。AMDAは武力衝突が始まって以来、現地協力者と連絡を取り合いながら状況を見守っており、7月末に難民支援の可能性について話し合うためAMDAは岡山倉敷フィリピーノサークルと協力して調整員と看護師2人をフィリピンに派遣しました。

フィリピン大統領府長官筆頭秘書官グロリア・メルカド氏との協議の結果、難民は長引く避難所生活により心身ともに衰弱し、生活環境も厳しい状況であることから、AMDAは避難所の子どもたちへはクレヨンと画用紙・塗り絵を入れた「お絵かきセット」500セットの配布、市内のアマイパクパク医療センター（APMC）へは医薬品、医療資材の提供を行うことに決定しました。

避難所の子どもに「お絵かきセット」を手渡すAMDAスタッフ

8月2日にミンダナオ島入りしたAMDAはイリガン市にあるAPMCサテライトオフィスを訪問し、主に手術で用いる医薬品などを手渡しました。続いて221世帯1,082人が暮らすイリガン市マヤ・クリスティーナ地区の避難所で、遊び場のない子どもたちに少しでも楽しんでもらいたいという想いから、この避難所の未就学児91人に「お絵かきセット」を配布しました。その他409セットは他の避難所に住む子どもたちへ配布するため、保健省地方オフィス担当者に渡しました。避難所の女性は「着の身着のままで、幼い4歳の子供を含む家族と一緒にマラウィ市からイリガン市まで1日歩き続けた。こうして私たちに会いに来てくれるだけでありがたい。子どもたちも興奮するほど喜んでいる」と話していました。

AMDAでは今後も現地と連絡を取り合いながら状況を注視し、国内避難民への復興支援も見据えた支援の可能性を模索していきます。

フィリピン・レイテ島地震医療支援活動

2017年7月6日の夕方4時フィリピン・レイテ島西部を震源とするマグニチュード6.5の地震が発生しました。レイテ医師会と連絡をとり現地の状況を注視していたところ、59世帯197名が避難テント生活を続けているレイテ島カナンガ町ヒロクトガン地区で医療ニーズがあるという情報が入り、AMDAは7月28日に現地入りし、レイテ医師会と合同で医療支援活動を行うことを決定しました。

AMDA・レイテ医師会合同医療チームは、ロマルデス医療大学と共に、233人（成人129人、小人104人）を診察しました。感冒症状、頭痛、皮膚のかゆみ、腰痛などの訴えに対し医薬品を提供しました。今回の地震による地すべりで家を失った人からは「テント生活による疲れが溜まっている中、無料で医師による診察を受けられたことに感謝している」という喜びの声をいただきました。

レイテ医師会医師による診療活動の様子

世界で続発する災害　地震・洪水への緊急医療支援

メキシコ沖地震

日本時間９月８日午後２時前、メキシコのチアパス州沖を震源とするマグニチュード 8.1 の地震が発生。

AMDA は 11 日に日本から鈴記好博医師（徳島大学大学院総合診療医学分野）と山﨑希看護師（調整員 / AMDA 本部職員）の２名を派遣し、現地協力団体である天理教メキシコ出張所の協力の下、最も被害の大きかった地域の一つである、オアハカ州フチタン市に入りました。フチタンでは、市庁舎や学校、病院、市場など、市民の生活の要となる建物が軒並み一部損壊や半壊の被害を受け、街の中心部では建物の倒壊も見られました。また、被災地では余震が続く恐怖から、昼夜問わず屋外や路上で過ごすこともあり、治安の悪化も相まって夜間は特に緊張状態が続いています。

倒壊した建物（オアハカ州フチタン）

AMDA 医療チームは、現地青年会メンバーの食糧支援に同行し、被害が多く経済的に厳しい状況で暮らす家族の多い地域を訪問し無料巡回診療を実施し、18 日に帰国しました。

ところが、20 日午前３時頃メキシコ中部を震源とするマグニチュード 7.1 の地震が発生したことを受け、山﨑希看護師が 22 日再びメキシコに向かいました。

【支援者からのメッセージ】「いつも迅速な行動、民間ならではの活動とうれしいです。支援の励みとなります。」

オアハカ州フチタンにて診療を行う鈴記医師

インド・ビハール州北部洪水

この夏、南アジアにおいてモンスーンによる洪水が発生し、インド、ネパール、バングラデシュ各国で大きな被害を出しました。AMDA が緊急支援活動を行ったインド・ビハール州においても甚大な被害が発生し、ビハール州危機管理部の発表によると９月３日時点で死者 514 人、避難者は今期モンスーン時期に入り累計 85 万４千人に上りました。

８月 27 日、28 日に現地入りした AMDA 職員２人は、現地協力者であるガヤ大学と元 AMDA ピースクリニック現地職員と調整を進め９月１日に、ビハール州北部サマスティプール市ガンガバンド地区に住む 300 世帯を対象として、食糧と日用品のセットを配布する支援活動を行いました。

浸水する民家

ネパール南部洪水

８月 11 日から降り続いた大雨によりネパール南部地域（タライ平野）で発生した洪水、地滑りは多くの人的・物的被害をもたらしました。

AMDA ネパールが政府の指示のもと、被災自治体や地方保健所と連携し８月 18 日から救援活動を開始したほか、AMDA ダマック病院と AMDA メチ病院は 10 人から 15 人の合同医療チームを結成し 19 日から 23 日まで避難所や村の診療所計５か所で巡回診療を実施しました。また、首都カトマンズから南西に車で約６時間のところに位置するナワルパラシ郡も洪水の被害を受け、18 日から５日間にわたり AMDA シッダールタ母と子の病院から医療チームを派遣し、巡回診療を行いました。

シッダールタ母と子の病院での診療活動

バングラデシュ北部洪水

８月半ばからの大雨によりバングラデシュ北部でも洪水が発生し、８月 21 日時点で死者数 114 名、約 700 万もの方が被災しました。

AMDA バングラデシュ支部は、日本バングラデシュ友好病院及び Society for Anti Addiction Movement（SAAM）という地元団体との合同で、８月 22 日から 26 日までの５日間、被害が大きいクリグラム地区及びガイバンダ地区に医療チームを派遣し緊急医療支援活動を実施。食糧、水、生活用品などの支援物資の配布や医師２人による診療活動を行いました。２地区で約 3,480 世帯（約 18,000 人）がこの５日間で支援を受け取ることができました。さらに状況を注視し必要に応じて対応していきます。

診察を行う医療チーム

第４回 AMDA 南海トラフ災害対応プラットフォーム調整会議

AMDA は７月 23 日、南海トラフ地震の支援体制や取り組みを探るプラットフォーム調整会議を岡山国際交流センター（岡山市北区）で開きました。連携する中四国の自治体や経済団体、医療機関などから約 300 人が出席。物資の供給や生活支援策など活発な話し合いが行われました。議長団は片岡聡一・総社市長、徳田善紀・丸亀市副市長、松田久・岡山経済同友会代表幹事、菅波茂・AMDA グループ代表で構成。

災害支援条例を制定した片岡市長は甚大な被害想定を踏まえ「他県から避難者を受け入れ、生活を支援する新たな条例を検討したい」と意欲を示しました。

松田代表幹事は「企業活動を通じて支援に役立ちたい」とし、民間業者の在庫を優先的に避難所に送る「流通備蓄」を進める考えを示しました。

災害時の連携協定を結ぶ赤磐市の友實武則市長は「人材育成を狙いに AMDA に派遣した職員の成長に手ごたえを感じている。相互扶助の精神を学びながら成熟した自治体を目ざしたい」と述べました。

熊本県益城町の職員による熊本地震の避難所運営の報告、AMDA 本部職員による食糧備蓄や宿舎確保、緊急輸送合同訓練の実施状況などの説明もありました。

調整会議は 2015 年から始まり、4 回目。菅波代表は「中央構造線断層帯による地震で瀬戸内海が大被害を受ける恐れもある。今後の調整会議は南海トラフ地震との双方の観点から論議を進めたい」と話しました。

災害鍼灸チームの第４回育成プログラムを実施

災害鍼灸チームの「第４回育成プログラム」（AMDA 主催）が７月 22、23 日、岡山市北区の岡山国際交流センターで開かれ、全国から参加した鍼灸師ら約 30 人は有事の際の円滑な鍼灸活動の意義、ノウハウなどを学びました。

初日の 22 日は、菅波代表が「鍼灸の最大のポイントは治療を通し体にさわることで生まれる相互の信頼関係を構築すること。今後の活躍を期待している」とあいさつ。講師６人が講演しました。23 日は「災害時における鍼灸支援活動の課題と解決」をテーマに、参加者も加わってディスカッションをしました。

講師の発言内容の要旨を紹介します。

◎**今井　賢治氏**（AMDA 派遣鍼灸師、帝京平成大教授）

避難所での鍼灸活動は、亜急性期（１、２週間から１カ月程度）から患者が増える。腰や肩の痛みなどの治療をはじめストレスの軽減、リラクゼーション効果があることがデータで判明している。

◎ **AMDA 熊本鍼灸チーム**（吉井治、松村幸子、山下千春の各氏）

熊本地震の避難所・広安小学校（熊本県益城町）で活動。鍼灸は心の健康維持に尽力できる素晴らしい仕事だとあらためて感じた。患者とともに苦しみ、感情を分かち合う気持ちを大切にしたい。

◎**佐々木賀奈子氏**（AMDA 大槌健康サポートセンター長）

東日本大震災で津波にのみ込まれ、奇跡的に助かった。生かされたこそ何かをしなければ…と懸命に生きてきた。患者の目線で考えることが災害鍼灸の原点だと思う。

◎**高橋　徳氏**（AMDA 派遣医師、クリニック徳院長）

鍼灸と西洋医学の双方の視点を大切にする「統合医療」は、米国の病院では専門科が出来ているが、日本にはない。医師はもっと患者の自然治癒力を信頼し、信頼関係の構築に努める必要がある。

岡山県立大学大学院が「災害」テーマに公開講座

岡山県立大学大学院が主催、AMDA が協力する第 14 回セミナー「災害医療援助特論」公開講座が９月 10 日、岡山市北区の岡山国際交流センターで開かれました。

AMDA 職員が南海トラフ地震の想定規模や事前準備、訓練の内容などを説明。続いて、AMDA と災害連携協力協定を締結している徳島県美波町由岐支所職員の浜大吾郎さんが「住民主体の事前復興まちづくり」と題して講演しました。

美波町は、南海トラフ地震で人口の約 30％が犠牲になるという衝撃的なデータが徳島県から発表されています。浜さんは「町内では就職や結婚を機に転出する“震災前過疎”が深刻化し、コミュニティーが崩壊する可能性が出ている」と指摘し、「大好きな郷土をどう次世代に伝えていくか」をコンセプトにした、全国でも珍しい「事前復興まちづくり」の取り組みを紹介しました。

講演する美波町の浜大吾郎さん

AMDA 中学高校生会のメンバー４人は「日本の将来を担う若者は防災に目をそむけてはならない。災害が起きたら相互扶助の精神で乗り越えていきましょう」と呼び掛けました。会場の学生や市民ら約 100 人は、メモを取りながら真剣に聞き入っていました。

ガンダン寺院で「平和祈願祭」

モンゴル仏教総本山ガンダン寺院での平和祈願祭にて

9月3日、モンゴル仏教総本山ガンダン寺院でGPSP医療と魂のプログラム「平和祈願祭」がおこなわれました。モンゴルでは、ハルハ河戦争(ノモンハン事件)で多くの方々の尊い命が失われました。二度とこのような悲惨な歴史が繰り返されないよう、2008年より毎年平和祈願祭を開催し、今年で10年目となります。今年は、ガンダン寺院と宗教法人大本の方々に加え、AMDAボランティアの矢部ご夫妻がご参加くださいました。

一人でも多くの人たちのためにそれぞれの立場で力を尽くしていくことを参加者一同、心に誓いました。

【GPSP(世界平和パートナーシップ)医療と魂のプログラム】第二次世界大戦の犠牲者には、宗教者による慰霊祭を、そしてその家族にはAMDAの医療サービスを提供する、宗教者とAMDAの合同事業です。なお、宗教者の皆さまは自費でこのプログラムにご参加いただいております。

子どもの眼科健診、保健省が制度化を発表

AMDAは、モンゴルで2008年以来、子どもの目の健康を守るために、首都ウランバートル市内や郊外での眼科健診を行ってきました。また同時に就学前子どもの眼科健診を制度化することの重要性を関係各方面に訴え続けてきました。

本年も人類愛善会モンゴルセンターのご協力のもと、9月1日にウブルハンガイ県グチンウス村(ウランバートルから車で11時間)において川崎医療福祉大学感覚矯正学科の高﨑裕子先生を中心に眼科健診が行われました。今年は、113名(5～17歳の子ども78名、成人は35名)が健診をうけ、そのうち斜視は5名、病院への紹介が必要であった人は7名いました。

9月5日には、保健大臣に面会し、菅波代表と両国の事業関係者でAMDAがこれまで子どもの眼科健診の制度化を目指して活動を続けてきたことなどを報告しました。

健診を行う高﨑先生

その後の保健省でのミーティングでは、高﨑先生から、過去3年間のAMDAの健診結果として、弱視、乱視の割合が世界の平均値より高いこと、めがねをかければ解決できる子も半分はいることなどが示されました。そして菅波代表からは、日本の学校健診の取り組みを活かすことが提案されました。その10日後の9月15日には、保健省において記者会見が行われ、正式に子どもの目の日が制定され健診が行われることが全国に発表されました。

医療機器の説明をする佐藤先生

佐藤拓史医師が医療セミナー開催

AMDAは、協力協定を結んでいるウランバートルエマージェンシーサービスとモンゴル国立医科大学それぞれの団体を会場に、前者では救急医療について9月9日より、後者では内視鏡について11日より、各2日間計4日間にわたるセミナーを実施しました。

講師は、救急の外傷の診断方法や初期治療と内視鏡を専門とする佐藤拓史医師(東亜大学医療学部教授、AMDA南海トラフ災害対応プラットフォーム運営委員会副委員長)。9日の救急医療セミナーには、ウランバートル市保健局所属の20の医療機関から幹部やリスクマネージメントチームを中心に約100名の救急医が参加しました。内視鏡のセミナーにはこれからのモンゴルの内視鏡治療を担う医師達が参加しました。両団体より来年の継続を強く要望され、AMDAは今後も佐藤医師によるセミナーを実施することを約束しました。

インド・ビハール州ブッダガヤでの活動

AMDA ピースクリニック

AMDA ピースクリニックは 2009 年にアーユルヴェーダクリニックとして開院後、2014 年からは地域のニーズに対応するため、母子保健に特化したクリニックとして再スタートを切りました。現地看護師による妊産婦の家庭訪問と月 2 回行う妊産婦健診を継続的に行っており、新たな試みとして健康教室の開催と栄養プログラムを開始しました。

AMDA ピースクリニックは対象地域に住む妊産婦の家庭訪問を行っています。暑い日には 40℃以上になる炎天下の中歩いて各家庭を訪問するのはかなり体力的に負担がかかりますが、妊産婦との絆を深め、信頼関係を築くため定期的な家庭訪問は欠かせません。その信頼関係があるからこそ、妊産婦や新生児の状況が変化すると看護師に連絡、相談があります。

訪問時には妊産婦の健康相談、健康指導、新生児予防接種の接種状況の確認、妊産婦健診の案内と健診事前登録などを行っています。9 月 8 日には現地産婦人科医による妊産婦健診を実施し、妊婦 23 名が訪れました。必要な方には血液検査も行われ、健診後には薬を提供しました。

また、新たな試みとして健康教室を開催。9 月 4 日に行われた教室では「栄養価の高いモリンガ」について現地看護師が妊産婦 17 名に対して授業を行いました。タンパク質、ビタミン A、B、C やミネラルを豊富に含むモリンガは現地でも通年、安価に手に入ります。授業の後には、モリンガと野菜のスープを提供しました。、一度口頭で伝えるだけでは定着しにくい知識も、継続的に伝え続けることで定着していきます。

今後も AMDA は貧困率の高いビハール州ブッダガヤにおける妊産婦への支援を継続し、健康教育を通して妊産婦はもちろんのこと、コミュニティー全体における健康に対する知識の定着と向上を目指していきます。

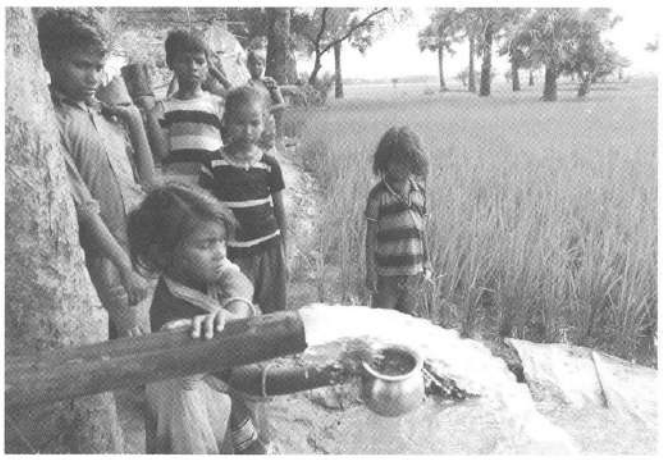
モリンガ (野菜) スープを配布する現地スタッフ

シュリプール村生活支援 ～井戸の建設と祈りの場の提供～

AMDA ピースクリニックが母子保健事業を行っているブッダガヤにあるシュリプール村で、AMDA は新たに生活支援を始めました。社会的経済的発展により住民が十分な食糧を確保できるようになることで栄養状態が改善され、ひいては健康状態の向上につながります。
2017 年 7 月から 8 月にかけて、シュリプール村の人々の要望に応える形で、AMDA は生活支援として、井戸の建設と祈りの場の提供を行いました。

シュリプール村には灌漑が発達しておらず、農業用水は井戸水に頼っています。以前は公共の井戸がなかったため、私有の井戸水を購入し稲作を行っていました。そこで AMDA は公共の農業用井戸建設を支援し、7 月下旬、約 23 メートル地点から農業用井戸に必要な水量が出たという嬉しいニュースとともに、住民が井戸水の出ている周りに集まって喜んでいる様子が写ったビデオも届きました。今期から早速、井戸水を利用し稲作を始めています。

また、「シュリプール村に祈りの場を！」という地元の人々の声に応えるため AMDA は祈りの場の提供も行いました。広さ 2 畳ほどの建物の建設は地元の人々が携わり、地域の守り神として悪を祓うドゥルガの神を祀ります。今後は村で担当者を決めて、維持管理に当たります。



AMDA が支援した井戸の周りに集まる村人たち

シュリプール村の祈りの場

朝日医療大学校と連携協定を締結

AMDAは8月25日、朝日医療大学校（岡山市北区奉還町）と連携協力協定を締結しました。相互扶助の理念のもと双方が協力し合い、地域や国際社会への貢献、人材育成に寄与することを目的としています。

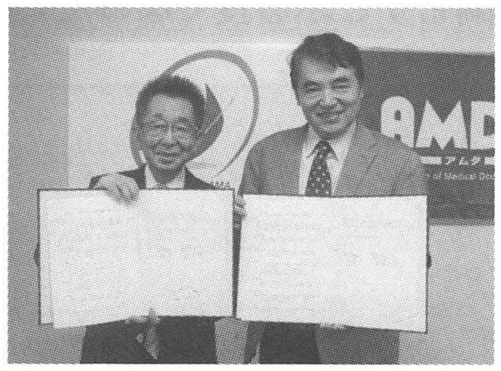
締結式は、菅波茂代表と柚木脩学校長が協定書に署名・調印した後、柚木学校長は「支援を受ける側にもプライドがあるというAMDAの素晴らしい理念、実践を医療教育に取り入れていきたい」と述べました。

菅波代表は「豊富な人材、研究内容を活用させていただき、災害鍼灸という新しいコンセプトをWHOに提案できるよう努めたい」と協力を依頼し、2人はがっちりと握手を交わしました。

協定書によると、AMDAと朝日医療大学校は災害医療をはじめ、アジアの伝統医学との交流、人材育成などで協力することにしています。

同大学校は医療人を育成する専門の教育機関。2016年4月、朝日医療専門学校岡山校など3校が統合して開設。看護や鍼灸、柔道整復など6学科があり、学生や社会人ら約900人が学んでいます。

岡山県鍼灸師会と連携協定締結



AMDAは7月22日、将来発生が予想される南海トラフ地震に備え、社団法人岡山県鍼灸師会（内田輝和会長）と連携協力協定を締結しました。

岡山国際交流センター（岡山市北区）で行われた締結式では、菅波茂代表と内田会長が署名・押印し、握手を交わしました。

菅波代表は「鍼灸治療は被災者のメンタル面でも役割は大きい。協定の締結は心強い」とあいさつ。内田会長は「被災者の体調不良や不眠、食欲不振などの軽減に尽力したい」と述べました。

協定書では、被災者の緊急人道支援を円滑に行うことを目的とし、県鍼灸師会はAMDAからの連絡を受け、被害が予想される徳島、高知県内に、可能な範囲で鍼灸師、マッサージ師ら専門職を派遣するとしています。

県鍼灸師会は1914年、鍼灸医学の効果的な活用と普及を目指して設立。会員は約220人です。

AMDAと赤磐市が初の防災国際フォーラム

AMDAと災害時の連携協力協定を締結している岡山県赤磐市は共催で、初の防災国際フォーラムを開催します。テーマは「AMDAの活動から“まちの防災”を考える」です。AMDAグループ代表の菅波茂代表と赤磐市の友實武則市長による対談をはじめ、南海トラフ災害対応プラットフォームの準備状況、AMDA中学高校生会のスリランカ平和構築活動についてそれぞれ報告をします。

◎入場無料。申し込み不要。

◎日時：11月19日（日）午後1時半～4時

場所：桜が丘いきいき交流センター（赤磐市桜が丘東5丁目）

※問い合わせ　赤磐市くらし安全課（086-955-4783）

多くの方々からご寄付をいただきました。一部を紹介します。

サイクルセンター岡山様

さしこう津山様

熊本地震の益城町で職員に災害鍼灸治療

熊本地震から約1年半―。「行政職員の心のケア」が叫ばれる中、震度7の地震を2度も観測した熊本県益城町では、自治体と協力し職員を対象にした鍼灸治療に取り組んでいます。「被災者であり、職員でもあるという立場の中で、時間の経過とともに心身は限界に追い込まれつつある」と診察した地元の鍼灸師は警鐘を鳴らしています。

益城町とAMDAは、肩こりや頭痛など慢性的な不調を訴える職員が増えつつあることから、「職員へのサポートは震災復興に向けての一つの要」として鍼灸治療を実施しています。治療はAMDA災害鍼灸熊本チーム（4人）が対応。非常勤を含め約500人の役場職員から診察希望を募り7月20日から開始し、今年度は毎月第1、第3木曜日の午後に実施。益城町役場で行われているメンタルケア専門家チームの会合にも参加し、治療結果を共有し、包括的な健康支援を目指しています。治療を受けた職員からは「気持ちよく、体調もすこぶる良くなった」「肩がすっきりし、気分がゆったりした」と好評で、同町では2回目の施術を希望する職員も多いとしています。

チームリーダーの吉井治さん（48歳）は「職員はストレスを内に秘めて頑張る傾向にあり、異常なほどの疲れ具合にあらためて衝撃を受けた。私たちも気持ちを引き締めて活動に当たりたい」と話しておられました。

【AMDA災害鍼灸】 東日本大震災（2011年3月）で初めて採り入れ、被災者に好評だったことから広島市の土砂災害（14年8月）でも実施。効果が確認できたため、AMDAは同年から年1回、災害鍼灸チーム育成プログラムを始めています。

インターンシップを経験して

名桜大学国際学群国際文化専攻3年　**井上 瑠七**さん

沖縄県名護市にある名桜大学国際学群国際文化専攻3年の井上瑠七です。8月21日から9月1日までの2週間、AMDAでインターンシップを行いました。

国際協力に関心があり、大学のゼミでは主に国際貢献や国際政治について学んでいます。AMDAで学んだことは、様々な支援の仕方があることです。海外で学校健診を行い健康の大切さを教えたり、洪水被害にあった国へ支援に向かったりしていました。また、南海トラフ地震津波の大被害を想定し、事前に入念な支援準備をしていることに驚きました。

私は将来、東南アジアと日本をつなぐ仕事をしたいと考えています。今回のインターンシップの経験を活かし、常に先のことを想定しながら、人々のニーズに応えられる人材になれるよう努力していきます。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

インド洪水、メキシコ沖地震で街頭募金活動

AMDAは9月5日にインド洪水、14日にメキシコ沖地震の被災者支援を呼び掛ける募金活動をしました。

JR岡山駅の東西連絡通路において職員やボランティアが市民らに協力を呼び掛け、洪水や地震で被害を受けた民家の写真や死者や被災者らの被害状況を記したチラシ（A5判）160枚をそれぞれ配布しました。

AMDAが“街角トーク”を始めました

AMDAは、職員やボランティアが街頭に出て市民とふれあう“街角トーク”を始めました。

市民の声に謙虚に耳を傾けてアイディアを支援活動に取り入れ、市民とともに歩むAMDAをめざして企画。8月4日と9月4日に行いました。JR岡山駅の東西連絡通路で、AMDAのユニホーム姿で参加。AMDAの理念を書いたチラシ（A5判）を各160枚配布し、国内、海外で活動する姿を紹介した動画もパソコンで流しました。市民からは「AMDAは困っている人を助ける団体と小学校の授業で習った」「小学校でAMDAの募金をしたことがある」「活動ぶりをテレビで見て涙が出た」といった声を頂きました。今後も毎月1回実施する予定です。よろしくお願いいたします。

平成30年 AMDA支援年賀状企画のご案内

今年も（株）中野コロタイプ様のご協力によるAMDA支援年賀状企画を同封しご案内しています。印刷費の一部がAMDAへの寄付となるものです。同封のチラシまたはインターネットでお申込みください！

11/27までのご発注で20% OFFです！

年賀通り　検索

平成30年・年賀カタログ

お問い合わせ◇086-229-9113　年賀通り

□編集後記

インド洪水、メキシコ沖地震…。今年も自然災害が相次ぎました。人類の英知を結集しても現段階で災害を予知するのは難しいのが実情のようです。

一方で、災害を誘発し被害を拡大させる自然破壊はどんどん進んでいます。あらためて“自然との共存”を真剣に考える時ではないでしょうか。

今回のジャーナルが今年の最終号となります。皆様には大変お世話になりました。心から感謝いたします。

（編集担当・今井康人）